

3-16. 奄美群島広域事務組合（鹿児島県徳之島）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

徳之島は奄美大島の南西に位置し、名瀬港から同島の主要港である亀徳港まで航路距離で 109km の地点にある。周囲 89.1km、面積 247.77km² の島で、耕地面積が全面積の 28% (6,880ha)、林野面積が 43.3% (10,724ha) を占めている。人口は約 25,000 人で、徳之島町、天城町及び伊仙町の 3 町で一島を形成している。

奄美大島に次ぐ大きな島で、中・古生層や一部火成岩類よりなる基盤岩類がほぼ全域にわたって広く分布し、山岳としては井之川岳 (645m) を主峰とする山脈が島の中央を走り、島を東西に両断している。河川の主なものに、秋利神川があり、西海岸に注いでいる。海岸線は単調であるが、沿岸にはリーフが発達している。

総面積は奄美大島の 3 分の 1 に過ぎないが、耕地面積は群島中最大で、さとうきびを主体に野菜、畜産 (肉用牛) との複合経営の農業が営まれている。さとうきびの生産額は群島総生産額の 48.9% を占め、また畜産も群島の 44.0% を占めている。

自然は、猛毒で知られているハブや、天然記念物として保護されているアマミノクロウサギ、トクノシマトゲネズミ、オビトカゲモドキ、徳之島の固有種であるハツシマカンアオイ、トクノシマエビネなど、貴重な動植物が多く生息している。

【平成 24 年度奄美群島の概況より抜粋】

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

奄美群島では平成 26 年度中の国立公園指定および世界自然遺産登録を見据え、豊かな自然や固有の文化などの自然観光資源を活かした高品質なエコツアーの提供と着地型観光の推進を目指し、エコツーリズム推進協議会やエコツアーガイド連絡協議会等の組織整備やエコツアーガイド認定制度及びエコツーリズム推進全体構想の策定について検討がされているところである。

本事業の対象地域である徳之島においては、平成 25 年 8 月に徳之島エコツアーガイド連絡協議会が発足され、観光客への印象形成をする観点からツアー造成を検討しているが、エコツーリズムをどのように捉え、どのような仕組みをつくれればよいか、どうすればエコツアーを地域から生み出せるか試行錯誤しているのが現状である。

本事業を導入することにより、宝の 5 分野（「自然」「生活の知恵」「歴史」「産業」「人」）を発掘し、地域における自然と人間の関わりを季節の移り変わりに表現するフェノロジー・カレンダーを作成し、季節毎に何を見せるのかを考えることにより今後のツアー造成に繋がり、徳之島エコツーリズムの確立を目指す。



(2) アドバイザー派遣実施の概要

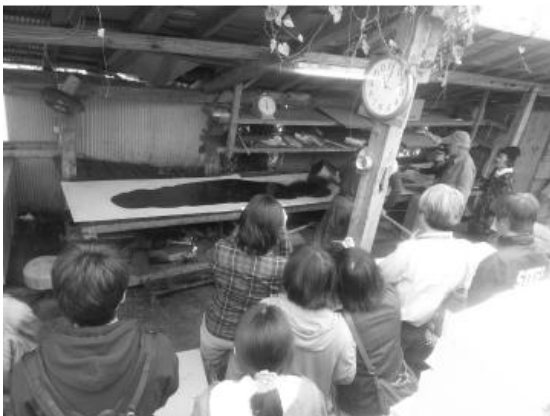
日 時	平成 26 年 2 月 22 日（土）～平成 26 年 2 月 25 日（火）
場 所	徳之島一円
アドバイザー	文教大学 国際学部 教授 海津 ゆりえ 氏
参加者	徳之島エコツアーガイド連絡協議会、徳之島エコツーリズム推進協議会、徳之島町役場地域営業課、伊仙町役場企画課、奄美群島広域事務組合
スケジュール・方法	<p>【1 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヒアリング ふり茶（伊仙町西犬田布） ・ナイトツアー参加 山クビリ線（徳之島町）、当部林道（天城町）～母間林道（徳之島町） <p>【2 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フェノロジー・カレンダー作成 <p>【3 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヒアリング 芭蕉布（伊仙町目手久）、まち歩き（伊仙町伊仙）、塩づくり（伊仙町西犬田布）、黒糖づくり（伊仙町犬田布）、闘牛（伊仙町目手久） ・フェノロジー・カレンダー仕上げ <p>【4 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヒアリング 黒糖焼酎造り（徳之島町大原）



ふり茶



役所跡地の石積み



製糖工場



徳之島の日常（闘牛散歩）

(3) アドバイスの内容

本事業は、フェノロジー・カレンダーを作成することを目的に実施したが、あくまでも作成がゴールではなく、作成までの過程を知ることが重要であることから、ヒアリングを通じ宝の背景を探る手法を学んだ。アドバイザーには、「フェノロジーから始めるエコツーリズム」と題し、講演をいただき、実際にフェノロジー・カレンダーの作成を行った。



作成状況

(アドバイザーのコメント)

- ・地域発観光とは「価値」を伝え、来訪者の「旅」の体験に変え、継承することであり、価値の受け売りから「自分語り」が重要。
 - ・エコツーリズムの主体となる人々が宝を探ることが必要であり、宝探しを続けるしくみが必要。
 - ・活動の公表を行い、情報の共有を図ること。
- (報告会を重視し、地域全体へのフィードバックを行うことが重要)

(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

エコツーリズムを推進するにあたり地域の資源を発掘し活用する仕組みである宝探しがいかに重要かを再認識することができた。また、地域の方々へのヒアリングを通じ、宝(点)と宝(点)が密接な関係で結ばれている(線になる)ことや、地域の成り立ちも自然が作り上げてきたことへの気づきとなった。

●今後の期待される効果

現在は、コアなメンバーでの活動が中心ではあるものの、ヒアリングをとおり地域の方々へスポットがあたりフェノロジー・カレンダーで『見える化』することにより地域の自信に繋がり、ひいては、エコツーリズムにおいて非常に重要である地域自身が地域を主的にマネジメントすることが期待される。

●今後の取り組み

フェノロジー・カレンダーを作成し『見える化』することにより今後、エコツアーコースの造成も活発化し、ガイドランスも宝の背景を知ることにより充実したものになる。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

- ・改めて地域主導によるエコツーリズムを推進することが重要かを実感した。
- ・身の回りにある当たり前ものにスポットを当てることで、今まで気づかなかったことに気付き、活用の方法が色々見いだせた。

●その他感想

- ・日本には、四季があり、その季節の移り変わりとともに自然や、食べ物、産業、行事などとうまい具合に繋がっていることは、分かっているようで分かっていなかったもので、再認識する機会となった。
- ・フェノロジー・カレンダーにすることで、エコツアーガイドに不慣れな人にもうまく島のエコツアーを伝えることができ、実践することが可能だと感じた。
- ・海津先生をはじめゼミの学生の反応は、今後エコツアーを進めていくうえで大変参考になった。旅人は何を求めて旅するのか？その答えは「非日常の出来事からの刺激」なのだと感じた。
- ・私達の身の回りにある全てが、活用の方法次第でエコツーリズムに結び付けられると感じた。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

文教大学 国際学部 教授 海津 ゆりえ 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

奄美群島は平成 26 年度の世界自然遺産への登録をにらんで、指定後の観光推進の方向性を「エコツーリズム」とし、現在、エコツーリズム推進法による認定地域取得に向けて群島一丸となって整備を進めているところである。群島 12 市町村にわたる有人 9 島のうち、既に奄美大島、徳之島、沖永良部島にはガイド連絡協議会が結成され、群島全域にまたがる「エコツーリズム推進協議会」も今年度末に設立される予定である。

今回のアドバイザー事業派遣先の徳之島は、NPO 法人「虹の会」を中心に、地域資源の掘りおこしと、宝を伝える活動（ガイド）を行っている。事業化できているわけではないものの、同会の活動によって徳之島の自然資源が数多く顕在化している。メンバーは徳之島 3 町におり、役場職員やガイドなど多様な職種の人材が関わっている。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

徳之島は自然と結びついた数多くの自然観光資源を有している。昨年度は、伊仙町の阿権集落の屋敷と、犬田布岬の海岸に広がる地質（メランジ）、アマミノクロウサギの観察小屋等を視察した。今回のアドバイザー事業でもヒアリングを伴う現地視察を住民とともに実施した。総じて徳之島は有形の自然資源、無形の文化資源とも豊かに持ち、かつ担い手や継承しようとしている人々がいることが明らかとなった。以下に主な資源を挙げる。

・アマミノクロウサギ住む森

徳之島は絶滅危惧種アマミノクロウサギが生息する島であり、同種が生息するのは奄美大島と徳之島のみである。徳之島は奄美大島に比べて生息面積は 10 分の 1 の約 33km²、個体数は奄美大島で 2,600~6,200 頭、徳之島で 120~300 頭と推定されており（生物多様性センターHP）、極めて少なくその希少性は奄美大島に比べて高い。現在、自然林の伐採、林道建設、河川改修、移入捕食者（マングース、イヌ、ネコ）がその存続を脅かしているとされ、徳之島ではアマミノクロウサギ保護施設を設けて普及啓発と保全の呼びかけに努めている。生息地はフェンスで仕切られて保護され、天城町にあるアマミノクロウサギ観察小屋では、モニターカメラによる生息地の観察ができる。夜行性のクロウサギを見るナイトウォッチングを案内するガイドもおり、生息エリアに細心の注意を払いながらツアーを実施している。

・「振り茶」文化

ふり茶とは、コミュニティの人々が集い、茶飲み話をする習慣であり、そのさいに飲む茶と作法をさす奄美独特の生活文化である。ふり茶は各家庭にあった囲炉裏端で振舞われ、茶と菓子や旬の野菜や漬物などつまみになるものを出した。農作業の合間や天候不良時の時間つぶしの「なぐさみ」で、茶の入れ方も茶道のように形式ばったものではなく、服装や作法も決まっていない。茶の入れ方は独特である。手桶にほうじ茶と玄米を合わせて淹れた茶を入れ、手製の大きな茶笥で勢い良く泡立てる。その茶を波打たせながら泡ごと茶碗に注ぎ、いただいた方は両手で茶碗をもって感謝しながら飲む。飲み干したらまた継ぎ足し、延々と時を過ごす。

西犬田布にお住いの明司シヅエさん（88 歳）は、その文化を次世代に継承するために、自宅に囲炉裏をこしらえ、月に 2 回、公民館でふり茶講座の講師を務めている。西犬田布集落の人々はほとんどがふり茶を振舞えるようになっているが、若い人々にはまだ伝えきれていないとのこと。伝え残していきたい徳之島の文化である。

写真①・ふり茶を点てる明司シヅエさん



・芭蕉布づくり

奄美群島にはもともと大島紬という染織文化があるが、芭蕉布は高価な紬と対極にある庶民の布である。素材が軽くて通気性がよく、南国・奄美の気候風土に合った布であった。かつて奄美群島のどの島でも野良着として織られ、使用されてきた。かつては伊仙町では大正時代まで泥染めや藍染めなどを行っており、昭和に入るまで、女性ほとついだら染織を始める習慣があった。徐々に工業製品に置き換わり芭蕉布が織られることはなくなっていった。芭蕉布の継承に危機感をもったすみこさんは、12年前から芭蕉布の再興に取り組み始めた。島に残る織機を12台集め、現在も芭蕉布づくりに取り組んでいる。

芭蕉は2月に切り倒して皮をはぎ（うーはぎ）、糸作り（うーあみ）を行う。一着の着物を織り上げるのに20本の芭蕉が必要であり、男女共同作業でなければ一人でできるものではない。織機は沖縄の機械とは異なる奄美特有の形をしている。

写真②・染織家當すみこさん

写真③・芭蕉布のスティナを羽織る



・黒糖づくり（徳南製糖）

奄美では薩摩藩の政策により、1610年頃からサトウキビ栽培と製糖に取り組んできた。かつての水田をつぶし、次々とサトウキビ畑に置き換えていった。サトウキビは徳之島では天城町で主に生産されているが、現在は大規模農家が増えたため、ハーベスターを導入して刈り農家が増え収量の90%に上る。サトウキビは暑すぎず、寒くない気候が適しており、奄美群島はちょうどよい環境条件を有する。サトウキビの刈り取りは12月末から3月までである。

徳南製糖はその中であって、現在も手刈りによるサトウキビだけを仕入れ、手作業で黒砂糖を製造する製糖会社である。昭和47年に創業し、現在二代目の社長が運営している。純度が高い製品はそのまま食用の他、菓子の原材料などにも使用されている。年間500トンの原料サトウキビを仕入れ、50トンの製品砂糖を出荷する。10トンのど飴の「那智黒」、天野商店に20トン、島外に13トン、島内7トンの比率である。10名のスタッフで運営されている同社の黒糖製造過程は昔ながらの手法であり、見学者が絶えない。しかし、機械化が進む中で、手刈りによるサトウキビの収穫がいつまで存続するかが危ぶまれている。



写真④・黒砂糖の製造工程



写真⑤・徳南製糖前にて。右から2人目が社長

・黒糖焼酎（西川酒造）

徳之島には黒糖焼酎の醸造所が数多いがそのうちのひとつで「島のナポレオン」等を産している。山中にある醸造所は、水の採取ができ、大規模工場を立地できる場所として選定された場所に建っている。製造工程の公開を行っ

ており、見学者も絶えない。島のサトウキビを活用しており、丸ごと徳之島の地産商品といえる。



写真⑥・黒麹、白麹など条件が違う仕込み樽が並ぶ

・泉

日本一の長寿者である故・泉重千代さん宅の裏にある泉は、現在は農薬等が混入し、飲用にはできないが、もとは集落の水場であった。山中を 12km にわたってくりぬいて掘られた水路が原型である。今もその手掘りの後を岩盤に見ることができる。「水を得る」苦勞を知ることができる場所であるが、日本一の長寿を支えた水としてとらえると、徳之島の力を知る場所としてとらえることもできる。

・福木とサンゴ石垣の家並み

今は少なくなった、ということであったが隆起サンゴを使った石垣と福木に囲まれた家並みが、今でも残されている。もとは屋敷と畑を囲んでいた垣とのことであるが、耕作をしなくなった家では、畑は庭ようになっており、広大な庭付き住宅のようである。屋敷の由来を伺っても、正確な年数はわからないほど歴史のある家並みである。今後、丁寧に掘り起こしていくことによって、徳之島の人の歴史が見えてくると思われる。

・塩づくり（ましゅ屋）

徳之島では塩を「ましゅ」という。ましゅ作りは生活と切り離すことができない、伝統的な作業である。ましゅ屋はこれを生業とし、製品（塩）の販売と塩づくりのワークショップ、集落内の古民家を借りた地産池消型レストランを営んでいる。

ましゅづくりの工程は、潮汲み→煮つめる→濾す（にがりと塩を分ける）→乾燥である。塩にも時期によって塩分濃度の違い等が現れる。できたての塩は、にがりを含んでほろ苦く甘い。島の野菜や料理との相性がとてもよい。



写真⑦（左）・工程を経て塩になってゆく



写真⑧（右）・塩を絞ってそこにたまったものが「にがり」。なめると苦い！

・徳之島コーヒー

犬田布岬のカフェのオーナーが農園主となり、30 年前に栽培を始めたのが徳之島コーヒーの始まりである。風に弱いコーヒーの木を台風等から守り、収量をあげるのは並大抵の努力ではなく、カフェで出せるようになるまで

20年以上を費やした。今は収穫した豆によって5月から数か月間、店に出せるようになった。

創始者の吉玉さん（カフェオーナーのご主人）は、地域の宝とすべく組合を作り、数軒の人々がコーヒー栽培に携わっている。

●アドバイス（講義等）の概要

今回のアドバイザー事業は、2月22日～25日までの足かけ4日間となった。主たる目的は徳之島における「フェノロジーカレンダー」づくりと、フェノロジーを通してみた徳之島の資源の再認識、自然観光資源の視察である。フェノロジーカレンダーづくりは23日に集中的に行い、視察は22日と24日、25日を使用して実施した。

（1）フェノロジー・カレンダーづくりワークショップ

ワークショップの流れは以下の通りである。

1) フェノロジーについての説明

フェノロジーとは季節暦の意味である。生物学用語であり、元々は動植物の一年間の生活史を指しているが、環境庁（当時）が西表国立公園においてエコツーリズム推進基盤整備調査事業を開始した1991年度において、資源調査の結果をとりまとめる際にこの概念を導入し、地域の自然資源、人文資源全般の通年暦に整理した。筆者とエコツーリズムアドバイザーの真板昭夫氏（京都嵯峨芸術大学）が、その当事者である。昨年度の徳之島におけるアドバイザー事業の際に、フェノロジーについて紹介をしたところ、次年度においてフェノロジーの作成を実施したい旨希望があり今回の運びとなった。

冒頭では宝探しによる資源抽出と、空間的整理、時間的整理、エピソード整理による宝の立体化を住民が行うことの大切さを説明した。

2) 季節の資源出し

宝の5分類を用い、自然・生活文化・歴史・産業についてA班：自然+生活文化+歴史、B班：産業・名人に分かれてグループワークにより宝の抽出を行った。あらかじめ用意した長さ250cm、幅90cmの特大暦フォーマットに書き込み・付箋貼付により書き込みを行った。また、作業過程でメンバーが話す言葉を拾い、アシスタントの学生たちが記録した。作業中のフェノロジーカレンダーの作業シートは写真の通りである。



写真⑨ 次々に書き込む

3) 総覧とディスカッション

出来上がった各班のフェノロジーシートを並べて各グループごとに結果を発表し、互いにコメントを加えたり、縦方向のつながりを論じ合ったりして、フェノロジーカレンダー作業シートを補完した。「徳之島を知っているつもりだったが、全然知らなかった」「みんなすごく詳しい!」「ある人が知っていることはほかの人は知らなかった」「子供たちに伝えたい」などの感想が飛び出した。

また当初の参加者にはいなかった専門分野である「食」については、翌日のワークショップの際に名人（参加者

の一人の親戚)を招き、フェノロジーづくりに協力していただくなど、臨機応変に展開した。

(2) 名人リストづくり

宝の5分類の5番目にあたる「名人」については、人物名、分野、居住地、およその年齢などを挙げ、リスト化した。約50名の名人がリストアップされた。

(3) 自然観光資源視察

徳之島を代表する以下の資源について、ヒアリングを伴う現地調査を実施した。目的は、フェノロジーカレンダーに掲載されている資源の中にある徳之島らしさを表す代表的な宝が存在することに島民が気づくこと、宝にまつわるバックグラウンドストーリーや歴史、担い手、作業工程などをガイド役となる住民が学ぶことによって、ガイドに深みが出ることを体験してもらうことである。訪問先は以下の通りである。詳細は前項に記したとおりである。

- ・宝：芭蕉布づくり 訪問先：染織家（個人）宅
- ・宝：黒糖づくり 訪問先：徳南糖業
- ・宝：塩づくり 訪問先：ましゅ屋
- ・宝：闘牛 訪問先：なくさみ館



写真⑩（上左）・夕方になると闘牛を散歩させる風景が方々で展開される

写真⑪（上右）・闘牛名人の役場職員・遠藤要さん。闘牛をこよなく愛している。

写真⑫（下）・地域情報発信館として整備された伊仙町闘牛場「なくさみ館」

(4) 総括

今後の展開として、同様の手法で他地域のフェノロジーを作ることができること、作って終わりではなく、活用した上でのプログラムづくりなどに応用することが重要であることなどを伝えた。作業の結果は事務局の奄美群島広域事務組合にてとりまとめ、フィードバックを行う予定である。

●全体構想への取組状況・意向について

徳之島は奄美群島全域 12 市町村をカバーする奄美群島エコツーリズム推進協議会の加盟島の一つであることから、全体構想への取り組み状況などは奄美群島全域に関して述べる。

奄美群島は現在、環境省主導の政策により、国立公園の指定、世界自然遺産登録（琉球弧）等に向けてロードマップの中にある。2013 年 8 月に奄美群島エコツアーガイド連絡協議会（会長：美延睦美（徳之島在住・虹の会会長））が立ち上がり、2014 年 3 月 28 日に奄美群島エコツーリズム推進協議会が設立する予定である。同協議会は主要 5 島（奄美大島、徳之島、喜界島、沖永良部島、与論島）に各支部を置き、また同島群にはエコツアーガイド連絡協議会を設けて連携を図るとしている。（図 1）

各島とも複数の基礎自治体を含んでおり、全体で 12 市町村に分かれている。群島は、上記の国立公園や世界自然遺産登録に先立ってエコツーリズム推進協議会を結成し、推進法に基づく認定地域となることを目指している。すでに全体構想の作成は終盤を迎えており、ドラフトが完成している。協議会では基本構想は群島をまとめて一つのものとし、12 市町村の首長が連名で署名を行うものを想定している。このような形態は他地域では未だ見られないが、今後、島しょ地域でエコツーリズム推進協議会を結成し、構想書を策定する際のモデルとなると言えよう。

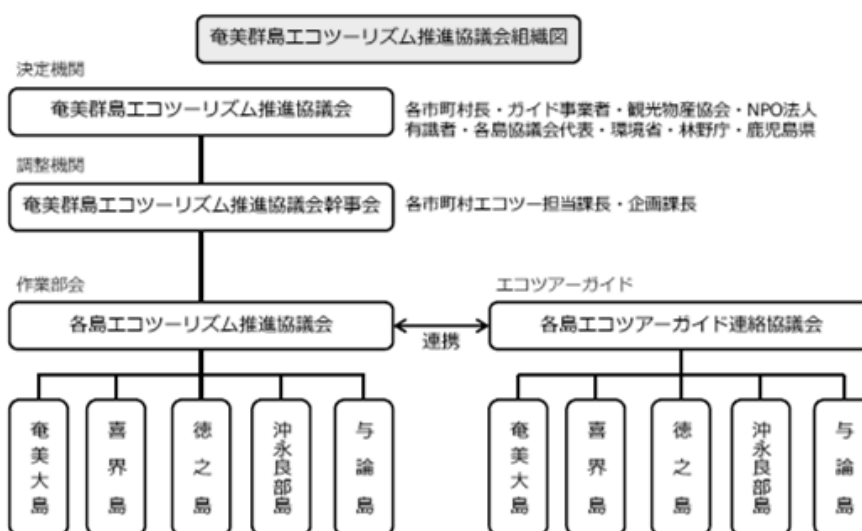


図 1 奄美群島エコツーリズム推進協議会組織図

現実的には、上図 5 島は一律なエコツーリズムへの取り組み状況であるとはいえない。奄美大島は既に多くのエコツアー事業者やガイドがおり、ガイド事業先行型である。昨年度訪問した住用村のように、住民主導によるエコツーリズム推進をめざす地区もあるが、住民による案内とエコツアーガイドを区別する動き等も見られるようであり、住民とガイドの連携の在り方が課題となっている。

徳之島は前述したように、住民や NPO の活動が活発で、個人ガイドも NPO のメンバーとなるなど、地域住民とガイド事業者の連携は比較的スムーズである。地域で受け入れるエコツアーサイトとして、徳之島はモデルとなりうると考えられる。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

2 年続けて奄美群島にアドバイザーとして伺った。経年での印象も含めて述べる。

（1）徳之島の深い文化

昨年度は 2 島を対象としていたため、徳之島での滞在時間も短く、資源の掘りおこしを踏まえたアドバイスには

至らず、入口部分の講義と意見交換にとどまった。今年はフェノロジーづくりのワークショップを通して、徳之島の多様な宝に少しでも触れることができた。それらを踏まえて、まず言えることは徳之島の文化はとても奥深いということである。自然を糧とし、与えられた資源として培ってきた生活様式やまちなみ、生業などが、時代とともに少しずつ姿を変えながら現在に引き継がれてきていることがわかる。

サンゴ石垣やフクギに縁どられた集落、集落のシンボル樹・ガジュマル、島でとれた原料を島で加工して作る黒砂糖や塩、焼酎、コーヒーなど拾い上げていくとまだ無数に出てくるであろう。再興に努める人々がいる芭蕉布も含めて、島の生活が自然の恵みに支えられていることがよくわかる。食もまた自然の恵みや季節と深い関わりがあり、海の幸・山の幸を巧みに使い、新たな産品も次々と生まれている。その背景には、担い手の人を思う気持ちがしっかりと生きている。このような自然とのつながりは、来訪者に、人間は何によって生かされているのかを考え直すきっかけを与える。

(2) 人と人のつながり

徳之島らしさの特徴として、人と人のつながりの濃さが挙げられるであろう。「名人」をリストアップした際、スラスラと人物名が挙がり、個人のプロフィールまでを皆が当たり前のように知っている。小さな島の特徴ともいえるが、島民どうしが互いに興味をもち、集う機会が多いことが伺える。

人と人がつながるための様々な装置があることも徳之島の特徴である。ガジュマルの木があればお年寄りが集うことや、囲炉裏端での茶飲み話の演出役「ふり茶」の習慣、貧しく苦しい生活を乗り越えていくための様々な「なくさみ」(牛なくさみ、漁なくさみ等)、宴会になれば唄を歌う習慣など、隣人とのつながりも希薄な都市住民には予想だにできない人間関係の濃さである。内なるコミュニティのつながりの強さは、ともすると排他的な印象につながりかねない。明司シヅエさん宅の玄関先にあった言葉、「キユウガメラ・イッチモーレ」(どうぞおあがりください)の精神が外に伝わるように意識する工夫は必要であろう。

(3) 文化の断絶

奄美群島は沖縄と同様、外の力によって翻弄されてきたことは歴史の学習等で知られていたが、時に受け継がれてきた文化を断絶してきたことがわかった。その中で大きな損失は二つある。一つは島口(方言)、もう一つは稲作文化である。奄美方言の貴重さや特異さは言語研究者によって指摘されているが、奄美方言とくれないほど島口は多様であり、かつ美しい。若者世代は使うことができないというが、話者を意識的に育成するなどしてぜひ継承して欲しい。

稲作は、薩摩藩によるサトウキビ栽培を契機に徐々になされなくなり、現在はすっかり消失した生業である。しかし米文化を下地とした伝統行事や祭りは受け継がれ、基盤となる生業と切り離された形で伝わっている。形骸化した祭りは姿かたちを変えていくおそれがある。米文化を下地としてきた島の背景を知るためにも、モデル水田を整備し、子どもの学校教育の中で利用するなどした方がよいと思われる。

(4) 地域づくりとしての観光

奄美群島はいま、エコツーリズム推進法による認定を得ようとしている。国立公園の指定や世界遺産など、指定や登録が続くが、一連の法制度にもとづくプロセスが「地域づくり」に結びつくよう、取得後のビジョンや地域づくりについての議論が必要である。取得で事業が終わりとならないよう、行政もサポートを続けていくことが求められる。

エコツーリズムは観光であることから、エコツーリズムを推進することは、観光による地域づくりを進めることを意味する。景観整備や従業員のおもてなし教育などにより、地域一丸となった受け入れ体制づくりを進めることが望まれる。来訪者の視点に立った徳之島を見つめることが必要である。

(5) エコツーリズムの実践に向けて

今回のワークショップで実施したフェノロジーカレンダーづくりや名人リストづくり、ヒアリングなどは、どのタイミングでも、どこでも実施可能な基本型である。今回の作業を参考に、今後も、皆で時折フェノロジーを考えたり、ヒアリングを続けたりして島の資源の理解を深めてほしい。徳之島にしかない、今しかない宝を探し、磨き、途絶えそうな文化を継承する運動をおこし、島の宝が未来を創る地域としてモデルを示してもらいたいと考える。徳之島の資源と人には、それを実現する力があると確信する。